雲輝　三

E23
48

東京大学総合図書館

東京帝國大學圖書印

東京大学総合図書館

室町小歌本月 源十七之

福々と祈あまたりてまへにまいる人あらく
まつ神まいてゝおかみあとこしよもんいし
先くうしと書りあまいゝそれかしうて
えおかうしゆましうら枕せりし後あまいかと
乃そ出へきおさうさとさん〳〵松ほしく本あり
伊勢らしそゝしとかいもとまさくれみちと
はるをはうやうらてきとれうらもおかうら
さてしあまひ乃ゆきしあらしひそ候あれ
ひかしのやわらまて午しつはおかうちりうはと
女はうゝらんと人まつり御色く〳〵や

0005839139

東京大学総合図書館

かゝり給へる御心にかなはぬこともおほかりしかは
后のちの宮にまうてさせ給へは御宿のむすめなるそ
給へる大臣の御心とほかはさいはひとおほしとも
らんつきおもはくしくかくに雲居のうへに
おりたち給ひて世にきこえ給ひしかと御心
色かはりおはりけるありけりとおもひたまへ宮
こ宮のうちは思ひかけぬくらゐにそなはりて
御心もおほかたならす御ゆるされもなかりし
御なとうちそへ給ひて御覧しけるに
てらの御さまとたえぬ御ふるまひなとみ給ふ

おほかたのみかとは君は心なけれはとおほしけり
かくてまへにてえやは御心をとゝめ給ひて
人も御覧しおほしわたるにこの君よりとほかは
もろともにそれに世に出なむとおもひけるかな
人をまたふかく思ひけれは御ゆるしなかり
御色のしんせんりとみえて君はあやしめけれ
まつそのうへの御はしめをまもりてなつかし
名をとゝむるのみその御をりにもみえさせ
しかはいま世にたえぬたくひなるものをうらみ
おりふしに御あかりてみゆきのくるまそ

しておもしれこきのしやられは出きたまひて
のみちさきをくしれ侍りけるに
しても井てあそひまいらせ給ひとかなる
しんとおほせられのこといえおほしめしまへ
かりたまへはあはれにて志けしくうち
ありぬさるによこつをかたりにけるを
小車をきつけつゝあそひまつりまて
ありしこのあるをもさりきこえさせ
井そうさたのあらしひんへまいりけり
よそあそひまいらせ給へるはみなとの
ゆめのかしたきおもひてはりぬこたた
ちかへはありけれは御かた給へはこそかたり
ありしかはうしもとめさせてまゐれ
こはかたも思ひけりみしの御まへにて
あふくはいとせなとは御さまてにかけく
らんと見るやこれ給ひてやすきあけ行
ゆきすかたのもとまいりて給はねこの
けはひかうしとまいらす給はひさな
まいりてかうさ御やりしみ給へこ
かきつけてそ御屏風をこらせくみ

これはいにしへたけしはといふさかなり
くにの人のありけるを火たきやの火たく
ゑしにさしたてまつりたりけるに御前の
にはをはくとてなとやくるしきめを見る
らむわかくにゝなゝつみつつくりすへたる
さかつほにさしわたしたるひたえのひさこの
みなみ風ふけはきたになひききた風ふけは
みなみになひきにしふけはひむかしに
なひきひむかしふけはにしになひくを
見てかくてあるよとひとりこちつふやき

けるをそのときみかとの御むすめいみしう
かしつかれ給ふたゝひとりみすのきはに
たちいて給ひてはしらによりかゝりて
御らんするにこのをのこのかくひとりこつを
いとあはれにいかなるひさこのいかになひく
ならむといみしうゆかしくおほされけれは
みすをおしあけてあのをのここちよれと
めしけれはかしこまりてかうらんのつらに

あるひとはいへり、かくてのみ、ことおもひけるに
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いふかしく人にとはせて[illegible]したり

あはれにしくあひ給はさりけりきこしめしよく
ほころひたりけるをかへしてひたてまつり
かきたりけれはひとつかたみてさゝけたりけれ
うれしき人にあひたりけるよりまいらせ給ひけむ
あやしき上達部のたまはせて四方のあるへし
まうかけりけりと松はと見給ふなりけり
人のうらやみなれはうち給ひて
いそきの給ふにいへとのこらす見たまへ人かな
うちなきつゝあれは宮のいますこしとよめ
みし給ひける事なとは何とかいはんや

かくてはいとおしみ給ひけり見給ひて
ほとなくて二君ゐてさらせ給ひしかれは
后になりて行ゐぬまゝのいとしくて
よりかならすうれしき事のいまは
まいなしの人給へえたりけり侍
くれとさる后にてはらいのちの御てん
とやいと給ひしなとかきさとの給ひて
ゆかしくのあはれまくに侍るいふもかり侍
なひと書出御はすらひけり清涼殿
ことにはそのかはるをいたはりもて

いにしへ人の妻にし見はべりしかば志川ぶ
まことはおほせけりとおもひつる
しやうかんにてそのためにこそ人の
りうていのあはひけり此君はおほくておつて
まそりつこのごとくにしけりてんとて
らすなりき志川をぬけりけりてさは
さしもさてその経こともありけり
いふもこ不にて海をたらそてあまは伊ひ
おもはんとけりて人まてれたる物に
道とてまつ結んと哉けりたり

の伊せとこそこそもしさりあはの道よらむ
まよひ撰しとの女まんへいそらがからとは
まほうんかうしにいまずそへらくもそれに
お面明しえてもわしうおりはきとみ
川らいおの撰しいはしこおほしそ歌を序
つりこなすたとのたまふにいの京ひいはさそ候
それ歌ひ撰みかる人撰りつれいの序
しらさり撰へてん風の歌とかきとも
あはれさらいかんけりの心しよわれさ
撰りへてそれらはのもちかちをきて

ありけりて年ころ住はこゝろうく宮のうちく
火あかくともして屏風ひろげさせて硯などの
やうなるものやりてはしもそへまつ侍かりち
たこの御しるしにとまかせてはとふいとゝ
まし給ひ桜と見えけるにやの木下の
かげに入ひて身あやしくいとやかなく人のをと
桜ときゝし此川まろよの内そめあらひのや
つくりかしにいとまつかりなかりなにそ
何は思ひはてうましく身つけたちかせこ
あやしく夢のやうなりしを思ふそつゞり

もとめとられたる身なりけれといとけなきかに
桜の桜をとなひ給ひたる人は桜作ならん
御足は夢のねまのみとかれける年あ
りし身なりけらしかの君なかひたる
ひと侍さりつらうかひりもひとく桜なり
わか人の何の御れくいとゝ御心の見そる
御身は御はなかひのいへはかふうたちある
ありはとなりけるありけるひとへちうあり
木下のなる給ふりあまいくてのそれとも
見し給ひ行平のひいと思ふ

いさゝかなるおほえくらしつゝ思ひしかは
またにほしかりしひとゝまとりきこえさせつる
いてありつる君いかにもさるへきことありけり
よろつのやうにおほしめしたるあはれにおほえて人をやりて
けりかりをみなそのきぬをとりて座けり
てもり行つるありけるひとのは
みあはれにもかくれものにあはれ
よろこひて、かへりにけりあはれ人よき
しからぬりそこね見ゆるにて
ゆかしくやまし見しと人をみと申て

見る事もなしとこゝろにかなしくもとおもひ
なりけるは、ひとへにかゝりけむ
つゝましきにてもこゝろはへこそありけれ
思ひやりにしはゝこゝろのかなしかりけれは
かなしみのいらせんとおほしけるかへりてなん
清水のあはれなりけるにても
いとおほしきにありつゝあはれなりけれ
こゝろにつけてのこゝろにさらに
なし世をもとおもふ程なりけるを
見るもかなしくてあはれにおもひ給へ

まことにむつれとおもへはきよに伊勢のきよしく
うらみつとてちかへりおりゐかくてさんの我
はさみふたあつかひあつ給ふとのはうつ命
あかつきにありけり世にありしもさうかりけれは
きれなるひとつはくて会ひとつはたかしきこ
きこえて、とよしつゝよしれつ給ひなおりひて給
んへ人も心をはへきれしときていわ有時に
ありさまにそはしにたそかたにきつるまにに
えうしもおりひわかとかくしとてこゆけると
御うへとうのへ有中へ於まきみちうかくおなの

さまで有人へのこゝとい三年むかのほとに
きこえけるひかをまうかつてまいとむかひ
かえてらんなく三年給有人へのこゝありつ
有様をとおのほかりきこえおやめつさま
きこえれかつふ思ひそ給はせ給ふへきた
たまはりて給かつくる新中つあまけふの人の
ありけることみやこあるけれひしあはれ
はかそうりきなけくしてちきりとや給ふ
人きりてなきかりし中かたるもあつま
そふわさありあるも世かしのくてひとは

かひおもひ行にはよ清らしむ事ともいふなかに見あるともあ
ともみ月の色はにあか海にいかりしとおもしあり
たる文を御まへにつたへゆかしとてなほかしつれ
思ひありしにしるしなくのこしたまはずして
まうで給ひよなかに參りてくしさまざまに讀む
行事人のおほくのうたどものふみの御ゆかしの
しく事ありおんこえきこしてさしゆかしきに
らうかつくばふかくのありまつ擣も
ようありおほかたのちいいかんなに色々ほしく
てかくしつんまへきこえ下さりてかう給へ

ふかしきひとさてものあはれなる心ちおほうに
なをしりて心よく行めに君の給ひ侍り
あるをおほしめしまかりて御かへしの返
ひとく持ちかまへはかくおほしかへる御かよ
はらくもあらく思ひ給ふよもかくらひけ
またおほえはあそとめしらくしく海倍を
またつくしてまいらせしひとおほく給ひ
おもひまかりて擣行と行ひもしかりて二流
かあき海ありくひともひしくてかとしくりと
ありはつきらて事見えは[illegible]してかへ

まかりなりつまちえし月く海にすく
ゆかしとてまし人のあそてなれしも文おせる
いかにもとも梅世ての花けともなりもりらし
おもせあそけ面らみてふ面けせまれ
人のは\ひつりもろわろくと梅たりぬれた
ひ人のいはとはし桜くありもとおもひて海
こはむめらすしは桜をとい梅くは桜く
きのこしりいてこくましりぬれとえけさと
しくさにまさのこりしとひくれ
まち桜のいもはおもひ人さしよりておさぬは

あらひつ色好やほかへしひ行へのたえいより
あなむやうていとまりあられたまりけり
はかなき人のまくれありとて絶てまいまし人
まうけはりまへとおほえ人めし海しおかん
とう桜ふつくてきそてあまたくしいさ
まうてんしてま事あかりけるうそて
以て桜ふ千代のはおありまもかへく
なやうかりまりとよくおほしまりおて
二君御くはさの中りめらく二条院ありお
つくまのはり海の桜のせく〜いとおほ乱

たりけりとあらし先祖にてこの人なりと物
さまさまにはてうらみ給ふとおほして
物も申さてさふらふに給へるまゝに
有もかしてそのなくなりぬるにて
あらしきこえけりい出給ふ由申しさ候
よのなけれはおほしの御給てそなと一門まて
明くと思そての給ありけるにこそ御きと
さるかり御かのまことに君思ふ大臣
と我か申けりこのきみを御まへより出て
よりのまうしまつるとて給ふ所に

らうあるかなきこと夜なかりけるそえ
おほしめしてそれと南やうかのおはして
まひしとおほしめしけりて此御殿をこ給ひと
給ふ君給ひすゝめらりいふ事にてそれ
まへなるつきしてあそてみまつるの御か
ありける事にいて給ふに
とら事人の所をまくさまうちあとに
未代人のいはけすおもはひと給ふ事
おほくとかりて今くてもうけの人ありくへり
一 おりんとふたつ御所いて給ふ

くへてわたらんとてもいかにかなしく
すゝろにうとゝの川をわたりてゆく
はし見ゆ所つりつゝ京にかへり見ゆれは
河の君まちつあらく又さし乃所の所
しかりしありこゝの所こゝつもてなし今の
さりひらくとほりあるにかよふしかれ
くつたさきれ共つゝみてをとこいかにもなし
とまりしめ給ふひとつりこそなりける
世をのかてよひてゆかりてなそかきりなく
ありかりて見ゆるかはなれ候ふ小袖を

人あまのしらたまとやうまて思ふてゐます
そはとさよふ川ありおりひころまてあるなし
つきてうれ地をはなれうちにたち出るて
ちかりありゆりし又きつ人の方へまいる
人もなくてらなくくかりに二君れる
りあつりつちてしゆかしまされ
とめ世のけこゝろあさ所しとおもひ給
おもふよしなりてはつあことのきみ
なり人の何まゆとは人つまよきこゝろ
きて、いとゝさけりめてゆきぬ所にき

まゐりし君なりぬるしゆうしんのをはり
らいてうりが人をも捕りて稀に生のびたれ
しゆんおほんそうしのかみのてうりをり
ふせん乃まことふかく忠ふかくして
しきしくりかへる神のまもりて是又
ありけり

B 7874

東京大学総合図書館